

「痛くはないですか」

楊林が訊いた。

「ええ、大丈夫です」

曹瑛が答えた。

曹瑛の両手は後ろ手に縛られ、短弓も矢壺も取り上げられていた。曹瑛が考え出した策だった。荒縄には、すぐ切断出来るようにあらかじめ切れ込みを入れてはいたが、たつぷりと雨を吸った縄は、曹瑛の手首に深く食い込んでいる。切断した時に手が痺れていないようにと、楊林は少し縄を緩めた。

「これ以上緩めないでください。覺きられます」

曹瑛が言った。

「ですが、時間がかかると血の巡りが悪くなります」

楊林の想いは、それだけではなかった。たとえ策であっても、曹瑛に縄をかけるのが、どうしても辛いのだ。

「楊林。ここは曹瑛殿に任せることだ。それよりも時が来たならば、遅滞なく縄を切れるように心の準備をしておくことだ」

楊恬が言った。

雨は少し勢いを落としていたが、代わりに風が強くなっている。早く宮城に入らないと、熱を奪われて身体の動きが悪くなりそうだった。雷もいよいよ近づいてきているようだった。

宮城の門の前に来た。

「都虞侯の楊恬だ。知府様に会いたい。門を開けてくれ」

楊恬が大声で叫んだ。いつもなら、門の前に二人の衛視がいるのだが、さすがにこの嵐では、門の後ろの監視所に籠かごっているらしい。楊恬は拳で門を叩いた。

何度目かの呼びかけの後、内側から門が開いた。

「おや、楊都虞侯。こんな嵐にどうしたのですか」

見知った兵士だった。龐軍との合同演習が年に数回ある。その時に斧の扱いを指導したことがある兵士だった。

「これを見てくれ」

楊佺はわざと、ぞんざいに曹瑛の左腕を取った。

「痛い」

曹瑛もわざと声を上げた。

「これは……」

衛視が、驚いたように声を上げた。

「そう。お尋ね者の曹瑛という娘だ」

衛視は曹瑛の顔を知らなかったが、楊佺にそう言われると、そうかもしれないと思い込んだ。

「こやつが魯權の屋敷を襲った首謀者だ」

衛視は、曹瑛の顔を覗き込んだ。雨に濡れて、曹瑛の顔は妖しいほどの美しさを見せている。

「この娘がですか」

衛視が楊佺に訊いた。

「そうだ。たまたま南門で見かけたので、息子と二人で取り押さえた。これでも、弓をよくするのだ」

楊佺は、短弓と矢壺を掲げた。

こんな美しい娘が。衛視は迷っているようだった。

突然、曹瑛が大声を上げた。

「この縄を解け。黄文柄の奴に、矢をおみまいしてやるんだ」
そう叫んで、曹瑛は暴れだした。

「こやつ」

楊佺が曹瑛の身体を押さえ込んだ。もちろん、形だけだった。

「こんなに可愛い顔をしてるのに、何て娘だ」

衛視が吐き捨てるように怒鳴った。

「楊都虞侯、知府に連絡を入れます。暫くお待ちください」

衛視が雨の中を走って行った。

楊佺が曹瑛に笑いかけた。

「曹瑛殿、役者ですな」

「失敗は許されません。そのために、砦を抜けて来たのですから」

「私は、胸が潰れるようでした」

楊林の顔は、雨に濡れた以上に青ざめている。

衛視が戻って来た。

「楊都虞侯。知府がお会いになられるそうです」

衛視が嬉しそうに言った。そういえばこの兵士は、楊佺が特別に目をかけて教えた兵士の一人だった。いい若者だったのだが。ふと、そんなことを楊佺は思い出した。

「初めは渋っていたのですが、娘がたぐいまれな美形だと言いますと、掌てのひらを返したように連れて来いと命じられたのです」

楊佺は、心の中で笑いを堪こらえていた。黄文柄は女好きで有名だった。それが命取りになりそうだった。死ななければ治らんな。楊佺に憐れみはない。

「分かった。手間を取らせた。礼を言う」

「楊都虞侯に礼などと」

衛視は照れたようだった。

「ここからは、私と息子だけでいい。雨が強いから、監視所に戻ってほしい」

「そうはいきません。任務を放棄することになります」

「知府には私の方から言っておく。心配するな、どんなに暴れても私が逃がすことはない」

「それは楊都虞侯ですから」

「おまえも早く監視所に戻れ。他の衛視は出ても来んじやないか」

衛視は、何度か監視所と楊佺を見比べていた。

「分かりました。お言葉にあまえさせてもらいます」

そう言い残して、衛視は監視所に走って行った。

「さあ、行きましょう」

楊佺が曹瑛を促した。

知府のいる宮城まではすぐだった。中に入ると、黄文柄が重そうな

身体を豪華な玉座に凭れかけさせていた。まるで帝のようではないか。楊佶は、唾を吐きかけた衝動に駆られた。

「雨に濡れた見苦しい姿で申しわけありません」

楊佶が言った。

「おう、楊佶ではないか。怪我をしたと聞いたが、もう大丈夫なのか」

黄文柄は、いかにも面倒そうに訊いた。

「今でも痛みます。この恨み、忘れようとも忘れられませぬ」

楊佶はわざとそう答えた。

「この娘が、太原府に店を構えていた曹瑛という者か」

黄文柄は曹瑛を見て、涎を垂らしそうな表情をした。

「宋雪華も、世にも稀な美形だったが、この娘もまた、負けず劣らずというところだろう」

黄文柄の目が、血走っているのが分かった。

「恐れ多くも、知府様のお命を狙っております。息子と二人で、またま南門を歩いていたら、この娘が弓矢を持って怪しい素振りをしていましたので捕らえました。尋問すると、知府様を狙っていたとのことでした。その場で殺そうかとも思いましたが、まずは知府様に、この罪人の処分をお聞きしようと思ひ直して、連れて来た次第です」

「さすがは楊佶だな。杜愔の下についておる平真は、融通のきかぬ馬鹿だが、おまえは見所があると思っておった。それで、この娘は儂が預かってよいのだな」

黄文柄は、今にも曹瑛の顔を舐めそうな様子だった。

楊佶は、慎重に部屋の中を見廻した。黄文柄の背後に二人、斜め前に二人、そして左右に五人ずつの衛士が、武器を持って護衛している。どれも知った顔だった。中には、楊佶が見込んで武芸を仕込んだ者もいる。部屋の裏、そして左右の部屋にも、衛士が待機していることは間違いなさそうだった。逃げ切れるか。一瞬、楊佶は心に迷いを抱いた。

「よく見れば、なかなか可愛い顔立ちでしたので、知府様がお喜びに

なられると思ひ、傷付けずに連れてまいりました」

楊佖はそう言いながら、心の動揺を抑えようとした。楊林は緊張で青ざめた顔をしている。

「ふざけるな、この豚野郎。おまえの好きにされるくらいなら、舌を嚙んで死んだ方がましだ。いや、死ぬ前におまえの汚い首を食いちぎってやる」

突然、曹瑛が叫びだした。必死に後ろ手に縛られた腕を動かしていた。慌てて楊林が曹瑛の身体を制した。どうやら、楊林の緊張も解けたようだった。

「威勢がいいのう。宋雪華もそうであったぞ。逃げられたのは惜しかったが、まあ、おまえが捕まったのでよしとするか。暴れるな。その可愛い顔に傷を付けたくはない」

衛士達は無表情だったが、どこか、黄文柄に嫌悪感を抱いている。

楊佖は、そう感じ取った。

「そうだ、楊佖。馮湧は殺されたのだったな。おまえに傷を負わせた女剣士にやられて。いい気味だ。高大尉※の権勢を嵩にきて、この儂に樞突きおって、死んで清々したわ」※高大尉 高俵のこと

楊佖は、自分がこの豚を殺したいと思った。

「馮湧の代わりに、おまえが都監になったらどうだ。何なら、儂が蔡太師※に頼んで、童枢密※に話をつけてやってもよい」

※蔡太師 蔡京のこと。

※童枢密 童貫のこと。

黄文柄は得意げだった。頭の中では、どうやって曹瑛をいたぶってやろうかと考えているはずだった。吐き気を催すほど醜い姿だった。

「そんなお手間をかけることはありません。この者達に復讐したなら、私は禁軍を去ろうと考えていたところですから」

「ほう、そうか。それもまたよいかもしれぬな」

黄文柄は、ほっとしたようだった。楊佖に褒美をやらなくて済む。

それは黄文柄にとって、歓迎すべきことだった。

「父上、娘が大人しくなりました」

楊林が言った。

「さすがに諦めたのであろう。それに、ここに来るまでに、ずいぶんと暴れていたからな」

曹瑛は、ぐったりしているように見える。

「どれ、娘をここに連れて来るのだ。よく顔を見たい」

黄文柄が、楊林に命じた。

楊林は、曹瑛の後ろについて黄文柄に近付いた。周りの衛士に、警戒の素振りは見られない。素知らぬ顔で、楊佺もそれに続いた。

「ほう、これは美しい娘だ。美しいと言うより、名匠が精魂込めて作った人形のような可愛らしさだな。ふふ、楽しみだ」

黄文柄は玉座から身体を持ち上げて、曹瑛に顔を近付けた。饅えた臭いが、部屋の中を漂った。

「いい匂いだ。人形のように可愛らしいが、ちゃんと若い娘の匂いがしておる」

黄文柄が、曹瑛の左頬を舌で舐めた。曹瑛は、微動たりともしなかった。

「楊林、今だ」

楊佺が叫んだ。同時に大斧を構え直した。

楊林が目にも止まらぬ速さで縄を断ち切った。ほとんど同時に、曹瑛の右手に小刀を握ませた。蒋唐の小刀だった。

曹瑛が、小刀を両手で握った。

黄文柄は驚いて、醜い顔をさらに歪めた。

楊林が槍を繰り出した。一呼吸で、正確に二人の衛士の首を貫いた。そのまま黄文柄の背後に廻り込み、凄まじい速さで後ろに立っていた衛士の首を貫いた。一旦ことが始まると、楊林に逡巡は見られなかった。

楊佺も、左右の衛士四人の頭を叩き割っていた。

黄文柄が、逃げようと後ずさを始めた。だが、身体の重みと恐怖から、思うように身体が動かないようだった。錦の官服の前が濡れている。恐怖で漏らしたようだった。

「黄文柄。雪華姉さんの仇、取らせてもらう」

部屋の中には、むせ返るように血の匂いが漂いはじめていた。

黄文柄が、醜く口を開いた。

「あれは……あれは魯權のしたこと……」

黄文柄の言葉が途切れた。

曹瑛が身体ごと黄文柄にぶつかっていた。小刀が、深々と黄文柄の左胸に突き立っている。肋を避けるように、刃は横を向いていた。

「うぐう……」

黄文柄が、蝦蟇のような呻きを上げた。

曹瑛は小刀から手を離し、楊林の差し出した短弓と矢壺を受け取った。

黄文柄は、胸から大量の血を噴き出しながら、床の上に崩れ落ちた。

曹瑛はその額に、至近距離から矢を放った。黄文柄の巨体が、冗談のように後ろに吹き飛んだ。額から覗いているのは矢羽だけだった。

扉が開く音がした。正面と左右の扉から、衛士がなだれ込んで来た。

三十人はいそうだった。手に手に、武器を携えている。

黄文柄の胸に突き立った小刀を抜きながら、曹瑛は覚悟を決めた。

楊林が庇うように曹瑛の前に立った。楊佶は衛士と戦っている。

目的は果たした。曹瑛は満足だった。これ以上望むことはない。だが、この二人を道連れには出来ない。わたしが死んでもこの二人は逃がす。

曹瑛は、三本同時に矢を番えた。

•••

「くそっ、退こうとせん」

珍しく李逵が感情を顕わにした。

「兄貴、これじゃこつちがへばつちまう」

陳達も弱音を吐いた。およそ弱音とは無縁そうな陳達にして、気が挫けそうな禁軍の猛攻だった。

もう、夕刻近くになる。禁軍の猛攻は、既に四刻※に達しようとし

ていた。※二刻 約一時間。

「董超の一隊が危ねえ」

陳達が呻いた。

「兄貴、救援に行ってもいいですか」

「行って来い。ここは儂が何とかする」

そう李達は言ったが、本当に守りきれられるのか、李達自身にも分からなかった。

禁軍の総大将は、よほどの覚悟でこの戦いのぞんでいる。李達はそう感じていた。地方駐屯禁軍とは思えない戦い方だった。李達は、銅堤山に籠っていた頃に、幾度も地方の禁軍と戦ってきた。太原府禁軍とも、数度戦ったことがあった。だが、今度のこの粘り強い戦い方は、これまでに経験したことの無いものだった。経略使の違いか。李達はそう感じていた。敵ながら、見事な総大将だ。李達は、微かに尊敬の念さえ抱いた。

雨は少しずつおさまってきたが、風が徐々に強さを増してきている。雷も遠ざかりつつあり、今では遠くで稲光が見える程度だった。

李達は、一の木戸の上に立って、戦場全体を見渡していた。董超が率いる騎馬の五十が、禁軍歩兵に囲まれようとしている。それを救援すべく、陳達の騎馬五十が歩兵の側面を突き崩している。歩兵は、一度は崩れてもすぐに集まり、堅い陣を組み直している。よほど訓練された兵だと感心した。禁軍騎兵は後方に下がって、戦闘に加わってはいなかった。おそらく、こちらが大きく崩れた時を狙っているものと思われた。騎兵が前面に出てくれた方が、戦場を混乱させやすかった。だが、敵の総大将はそれも頭に入れていたようだった。頑なまでに、歩兵だけの攻撃を続けている。

聞起と陳統が、果敢な攻撃を繰り返していた。今や、砦の左右を守るなどと、悠長なことを言っている状況ではなかった。一人とも、かなり前から単騎で広場に飛び出している。歩兵の間を、まるで飛ぶように駆け抜けていた。その度に、禁軍歩兵が十人ほど倒れた。二人は一体となって戦っている。その得物※の特徴から、遠くの敵は聞起

が、近くの敵は陳統が討ち取っていた。何よりも、朧月と弦月の動きが素晴しかった。歩兵達の頭上を風のように飛び越え、全く攻撃を寄せ付けなかった。※得物 得意な武器。

東汾山勢歩兵五十を率いている薛せつ覇はも、獅子奮迅の戦い振りだった。禁軍歩兵に鋭く突っ込み、敵が態勢を整える前に、素早く離脱することを繰り返している。若いだけあって、まだ疲れは見られなかった。

「公孫勝殿がおれば……」

李逵は思わず呟いた。

心が千切れるほどに、曹瑛が心配だった。責めることは出来なかった。この戦局では、決定的な何かが必要だった。このままでは、遠くならず砦は破られる。公孫勝が二十日もたすと言ったのは、当然この何かを起こしてでの話だった。だから公孫勝は、自分が行くと言っていたのだ。それを止めたのは李逵だった。曹瑛が行くかもしれないことは分かっていた。だが、こんなに早くとは考えていなかった。もっと早く、自分が行けばよかった。李逵は、痛切にそう思った。

唯一の希望は、公孫勝と時遷が救出に向かったことだった。だから、ここで公孫勝の不在を嘆くことは出来ない。李逵が救出に向かうより、公孫勝の方が成功の確率は高い。自分には、こうして大勢の敵と戦っている方が向いている。任せるしかない。李逵は、無理矢理心の中の不安を押さえ込んだ。

「頼む。公孫勝殿。必ず、必ず曹瑛を助け出してくれ」

李逵は声を出して天に祈った。

・
・
・

かなり前の方から、叫び声が聞こえてきた。身体中小さな傷でいっぱいだったが、平真は気にしなかった。やがて、戦闘が始まったような物音が聞こえて来た。平真は疲れた身体に鞭むちを入れて、必死に森の中を駆け上がって行った。息が荒くなってきた。山には自信があ

ったが、あの黒づくめの集団の速さは、とても尋常なものとは思えなかった。

「私も鍛え方が足りぬ」

平真はそう自嘲した。

上の方の騒然とした気配が伝わって来た。平真は足を早めた。

間道に出た。右手から闘争の気配がした。駆けた。

「こいつら速い」

怒号が聞こえて来た。

五十人ほどの男達が、闘争を繰り広げていた。砦の守備をしていた男達の分が悪そうだった。黒づくめの男達の動きに、ついていけないようだった。次々と森の中から、黒づくめの男達が飛び出して来た。黒死軍、その名が平真の頭の中に甦った。平真は、徒歩で持ちやすい短柄の三尖刀を振り上げた。

「いやあ」

平真は、雄叫びを上げて突っ込んだ。

黒死軍の男が一人、驚いたように振り返った。駆け抜けざま、右足を斬り飛ばした。男が平衡を失って転がり回った。次の男の腹を突き刺した。勢いのまま、柄で次の男の頭を潰した。具足※を着けていないので、簡単に頭を狙えた。一人一人はそれほど強くない。平真はそう感じた。※具足 簡易防具。

「何だ、おまえか」

あの不気味な男だった。

「監視に来たのかと思って、見て見ぬ振りをしていたが、邪魔しに来たのなら容赦はせんぞ」

男が身構えた。

隙は全く見えなかった。他の黒死軍の兵とは格段の違いだった。

「経略使様に阻止せよとの命を受けた」

平真が言った。その間に、男との間合いを測っていた。

「平真といったな。たかが都虞候が、我らの邪魔をすと言うのか」
男の態度は、明らかに平真を見下している。

「黒死軍とは、それほど偉いのか」

「ほう、杜愔から聞かされたな。杜愔の奴、よけいなことを」

「呼び捨ては許さん」

平真が怒鳴った。

「強がるな。おまえごときにかまっていられるほど、暇ひまではないのだ」

男が薄笑いを顔に浮かべた。

「俺にはやることがある。おまえの相手などしていられぬわ」

男が、周りの男達に合図した。十人以上の黒ずくめの男達が、平真の周りを取り囲んだ。まとまると手強い。平真はとっさに感じた。これまでとは別物の気が、平真を縛り上げてきた。不気味な男は、三十人ほどを連れて砦の小屋に向かって行った。

「おい、小屋にいるのは宋雪華か」

たった一人生き残っている、大きな身体の若者に向かって叫んだ。

「そうだ。助けてくれたあんたは」

石勇が答えた。五六人の黒死軍に囲まれて、身動きがとれない様子だった。

「私は平真。経略使様付きの禁軍都虞候だった」

そう言って、平真はぎよっとした。だったと言った。無意識のうちに、自分は禁軍を離れたと思っていたのか。だが、今はそんなことを考えている場合ではなかった。

「平真さんか、とにかく助かった。どうして助けてくれたのかは分からないけど、礼を言います。俺は石勇。石將軍石勇といいます」

「石勇か。宋家党の若者か」

「はい」

大きな声で、石勇が答えた。

「この者達は」

平真は、倒れている二十人ほどの戦死者に目を遣った。ほとんどが砦を護っていた男達だった。黒死軍の死体は、数えるほどしかなかった。

「蘇源さんという人の仲間です」

「蘇源というと、この砦の頭領だった男だな」

「はい、雄々しく戦って果てられました」

平真は、何も答えなかった。

横たわっている黒死軍の死体は、総て頭か肩を潰されていた。

「おまえがやったのか」

平真が訊いた。

「はい。いきなり大勢が飛び出してきたので、四人しか殺れませんでした」

石勇は、残念そうだった。

「いや、その若さで四人も倒したのは見事だ。普通の禁軍兵士なら、一人倒すのがやつとだろう」

褒められて、石勇は少しはにかんだ。

「平真さん。お願いがあります」

石勇が、真剣な顔で言った。

「何だ」

平真は、敵との間合いを測りながら答えた。黒づくめの男達は、少しずつ平真と石勇の囲みを縮めていた。

「俺が囲みを破ります。そこについて、平真さんは姉ちゃん達の小屋に走ってください」

平真は、そうすべきだと思った。かなりの数の黒死軍が向かって行った。何よりも、あの不気味な男が気にかかった。

「おまえが行きたいのではないか」

「それは行きたいです。でもこいつらが、黙って行かせてくれるはずがありません。俺よりも平真さんの方が強そうだ。だから、平真さんにお願います。姉ちゃん達を守ってください」

「こいつらを、おまえが一人で相手するということのか」

死ぬぞ。その言葉を、平真はやつとのことと押し潰した。

「平真さん。男には、自分の命よりも大切なものがある。違いますか」

石勇の何気ない言葉に、平真は胸を衝かれたようにたじろいだ。

「そう……かもしれん……」

「じゃあ、行きますよ」

石勇が、大きく鉄棒を回した。空気が焼けつくような鋭い振りだった。

雄叫びと共に、石勇が包囲の一角に突っ込んだ。黒い人影が、凄まじい勢いで横に飛んだ。首が真後ろを向いている。

「小屋の前は、晁蓋が守っています。早く助太刀してやってください」
平真は、一気に包囲の外に駆け出した。三つの黒い影が、石勇の頭上を襲っているのが見えた。

・・・

小屋の外に、異常なほど騒がしい気配が漂っていた。

九天玄女が、戸の方に目を遣った。

「天魁の星よ、来たぞ」

九天玄女が手に何かを握った。

「はい」

黄玉が嬉しそうに答えた。動く理由が出来た。それを喜んでいるかのようにだった。

「私と天貴の星が守る」

九天玄女が、低い声で言った。目に、異様なほどの鋭さがあった。

これが玄女様。雪華は別人を見る思いだった。

「黄玉、飛鏢を取って」

雪華が言った。黄玉が、十二本の飛鏢が仕込まれた胡服を持って来た。黄玉の動きはまだぎこちない。動く痛みがあった。

大きな音と共に、戸が破れそうにしまった。人が激突した。黄玉が、剣の鞘を捨てた。

「石勇は……」

雪華が呟いた。

「姉様、今は身を守ることだけを考えてください」

黄玉が冷静に言った。

また、戸が大きな音をたてて壊った。晁蓋の怒鳴り声が聞こえてきた。

黄玉が、戸のすぐ後ろに立った。

「晁蓋が戦っている。石勇は……」

雪華が叫んだ。

「姉様、落ち着いてください。石勇のことは、考えても仕方ありません。たとえ命を落とすことがあっても、石勇に後悔はないはずです」

「そんな……」

「姉様。聞起も曹瑛も、陳統も同じ気持ちのはずです。もちろんこのわたしも」

「何を言ってるの」

雪華の声は、怒気を含んでいた。

「姉様、これは戦なのです。当然人が死にます。それが、石勇であってもわたしであっても、不思議なことではありません」

黄玉の言葉は、雪華の胸に深く刺さった。

「玄女様。わたしが倒れたら、お願いします」

黄玉が、何でもないことのように言った。

「分かった、天貴の星よ。心置きなく戦うがよい」

九天玄女が静かに肯いた。

「黄玉、何を莫迦なことを言ってるの。あなたが死んだらわたしは」

また、人が激突する音がした。晁蓋の必死の叫びが聞こえて来る。

黄玉が、水平に剣を構えた。

•••

小屋の前に、十ほどの動かぬ身体が横たわっている。一人の若者が、傷付きながらも懸命に、戸の前に立ち塞がっている。石勇が言っていた、晁蓋という若者だろうと平真は思った。若者の足下に、三つの死体が転がっていた。黒い装束だった。傷付きながらも、若者が斬り倒したのだろう。平真は、一番近い男の頭を叩き潰した。

「貴様、まだ邪魔をするか」

不気味な男が怒りだした。目に憎悪の炎が燃え上がっていた。

「経略使様の命、必ず果たす」

平真は静かに言った。不思議に平静でいられた。

「どなたですか」

若者が声を上げた。肩で息をしている。無理もないと思った。これだけの手練れに囲まれて、よくもっていたものだ。しかも、三人倒していでた。

「平真という。この者達を阻止しに来た」

禁軍都虞候とは言わなかった。そんなことは、もうどうでもいいことだった。黒死軍を阻むこと。それだけしか考えなかった。

「阻止するだと」

不気味な男がせせら笑った。

「こいつはいい。おまえごときが止められるか。墓場の中で後悔することだな」

不気味な男が、左手で何かの合図をした。

黒ずくめの男達が、平真の周りを取り囲んだ。一糸乱れぬ動きだった。こいつらは手強い。平真は、三尖刀を握る手に力を込めた。

黒死軍は五十人ほどだった。平真が確認していた数よりも多かった。おそらく、別の道を切り拓いてきたのだろう。この者達なら、それくらいのことにはわけなく遂行するだろうと思えた。

「晁蓋だな」

「そうです」

苦しそうな声だった。

「下がっている」

「えっ」

「いいから下がっている」

「出来ない。命がある限り、俺は雪華を護るんだ」

「死ぬぞ」

「構わない」

晁蓋は、必死に叫んだ。

「足手まといになる。おまえを気にしては存分に戦えん」

晁蓋が絶句した。

「石勇は」

気を取り直したように、晁蓋が訊いた。

「分からん。私がここに向かった時は生きていた。生きていたのは、石勇という若者一人だった」

他は全員死んだのか。晁蓋は信じられない思いに駆られた。

「末期の言葉でも交わしているのか。それももう終わりだ。かかれ」
不気味な男が合図を出した。

同時に五人だった。寸分の狂いもなく、五人が跳躍してきた。平真は思い切り前に駆けた。上に向かって三尖刀を繰り出した。真ん中の刃が、一人を捉えた。すぐに引き抜いた。雨に混じって、赤い血が降り注いできた。連携が崩れた。地に降り立った二人の首をかすった。噴水のように血が飛び散った。残る二人は、地に降り立つと同時に短剣を投げてきた。平真の目を雨が遮った。駄目か。平真は覚悟した。鉄と鉄がぶつかり合う音がした。短剣は、二つとも地に落ちていた。息を荒げた晁蓋が立っていた。

「おまえ……」

平真が呟いた。

「戦う。最後まで戦う。雪華のためなら、俺はどうなってもいい」

晁蓋は気力だけで立っていた。短剣を落としたのが最後の力。平真にはそう思えた。

「晁蓋、助かった。足手まといと言ったことは謝る。おまえは、立派な戦士だ」

平真は心からそう言った。

「そうかい。俺は……俺は……雪華を」

晁蓋が、崩れるように倒れこんだ。

晁蓋の左足から、血が流れ出ている。短剣で刺されたようだった。残る二人が、並んで剣を突き出して来た。三尖刀で払った。間髪を

入れず、右の男の足を薙いだ。両足を地に立てたまま、男が後ろに倒れた。

膝から下を失くした男は、手だけで離脱を図っていた。平真は、残る一人に刃を向けた。男が、一瞬怯んだように息を呑んだ。三尖刀が弧を描いた。男の首から大量の血が噴き上がった。平真は晁蓋に近付き、袖を千切って左足を縛った。とりあえずの血止めにはなる。これで止まれば命の心配はなさそうだった。

次の五人が襲って来た。どうやら、攻撃は五人一組のようだった。それ以上だと、かえって隙が生じやすいのかもしれない。剣が平真の左袖を裂いた。細身の剣だった。持ち運びに邪魔にならないためだろう。長さも短めだ。

次の斬撃が首筋をかすった。平真は斜め前に転がった。身体が自然に動いている。背後から斬撃を受けた。横にかわして、三尖刀を繰り出した。手ごたえがあつた。黒づくめの男が、腹を押さえて崩れ落ちた。

「ちっ、あいつを釘付けにしろ」

不気味な男の叫びが聞こえた。

さらに十人ほどの黒づくめの男達が、平真を取り囲んだ。くそ、これでは動きがとれない。平真は舌打ちした。平真は、輪の一角を抜くようにした。だが、平真の動く方に黒づくめの男達がかたまるのだった。

「平真さん。俺のことはいい。雪華を……」

晁蓋の言葉が途切れた。気を失ったようだった。あれだけ血を失ったのだ、無理もない。平真はそう思った。

男達が何かを引きずってきた。それを自分達の前に積み重ねていた。平真はぎよつとした。それは黒づくめの男達の死体だった。仲間の死体を使って壁を築いていた。平真は、言いようのない嫌悪感を覚えた。こいつらは人か。

不気味な男が、満足そうにそれを見ていた。使えるものは、何でも使う。そう嘯うそいているようでもあった。

「きさまら、それでも人か」

平真が叫んだ。

男はそれを無視し、小屋の戸に五人の部下を遣った。

まずい。平真は跳躍した。壁を崩そうとした。短剣が飛んで来た。からくもかわした。壁の手前に降り立った。顔を出していた男の頭を割った。壁の裏から剣が突き出された。かわしたが、これ以上進むのは難しかった。

五人が小屋の戸を開けた。一斉になだれ込んだ。駄目か。平真の心の臓が、喉元までせり上がってきた。

五人が後ろ向きに小屋から出て来た。四人が倒れ込み、残る一人は暫くうつろに目を泳がせた後、崩れるように地に座り込んだ。遠目にも、二人の男の額に短剣のようなものが突き立っているのが分かった。もう一人は首から血を噴き上げていた。座り込んで動かなくなった男は、目に吹き矢を受けていた。おそらく毒矢だろう。平真はそう思った。

「まだいるのか」

不気味な男が怒鳴るように言った。

その声に誘われたかのように、小屋の中から人影が現れた。

平真は目を疑った。一人だった。それも、まだ若い女。

遠くで稲光がした。薄暗い辺りの様子が、一瞬光に包まれた。

女は、彫像のように剣を手にして立っている。一瞬ではあったが、その女の女神のような美しさが、光の中に浮かんだ。

五つの黒い影が、火に誘われる羽虫のように、女に襲いかかった。

女は舞うように剣を振った。女の身体が一回転した。五つの影は、女の足元で血を噴き上げていた。

「戦女神……」

平真はそう呟いたまま、暫く呆然と立ち尽くしていた。取り囲んでいる黒い男達も、平真を忘れたように女を見ている。

平真の左から、突然大きな影が飛び出して来た。影は、死体の壁を突き崩すと、そのまま黒い男達の中に突っ込んだ。三つの影が、横っ

飛びに吹っ飛んだ。あつという間のことだった。平真も前進した。

「平真さん。もう大丈夫だ」

石勇が、自信たっぷりと言った。平真は黙っていた。

「玉姉ちゃんが剣を執った。もう怖いものなんか無い」

「あれが、黄玉という娘か。馮都監を刺した」

平真は、まじまじと黄玉を見詰めた。馮都監を斬った女剣士。経略使の杜愔は、この女剣士にこそ拘ったのではなかったか。馮湧の仇を取る。杜愔がここまで戦を進めたのは、まさにそのためではなかったか。

「とても、凶暴そうには見えんが」

「玉姉ちゃんは、恐いけど優しいんだ」

「では何故、理由もなく馮都監を殺したのだ」

「何とか都監っていう人は知らないけど、武人と武人の試合をしたって、玉姉ちゃんが言ってたな。槍との戦い方を教えてもらったって」

「それが馮都監だ。槍の達人だった」

「自分が黄文柄に命じられて、意味のない戦で部下を失った。その償いに自ら命を絶ったようだって、玉姉ちゃんが言ってたな」

平真は、頭を殴られたような衝撃を受けた。そんな、と思った。だが、平真の心は、それこそが真実だと認めていた。生き残った護衛兵の話しか聞いていなかった。兵達にも聞けばよかった。何よりも、都虞侯の楊佺に聞けばよかった。平真はそう悔やんだ。

「一人で大丈夫なのか」

平真が訊いた。

「まあ、見てなつて。玉姉ちゃんの強さは桁外れなんだ。李達の小父さんと同じだよ」

平真は黙るしかなかった。小屋までには、まだ二十人以上の男達が行く手を塞いでいる。この男達を蹴散らしてすぐに救援に向かうことは、ほとんど不可能と思えた。

「おまえは誰だ」

不気味な男が言った。相変わらず、気持ちの悪い声だった。

問われた黄玉は、平然とした顔つきだった。

「柴進。小旋風柴進」

「柴進だと。ふざけるな、おまえは宋家党の一人、黄玉という娘だろう。調べはついているんだ」

黄玉は憐れむように男を見た。

「それは、仲間うちの名。おまえのような外道には、その名は名乗らない」

黄玉は、真つ直ぐ男の目を見据えている。

男が、思わず目を逸らすのが分かった。

「すごいな、おまえの姉ちゃんは。あの男に負けてない」

「そりやそうさ。外では、名を変えるようにしてるけど」

石勇が、自慢げに答えた。

「それはいいことだ。おまえ達の名は、手配されているからな」

平真はそう言いながら、何かが違うと感じていた。この若者達が、一体どんな罪を犯したというのだろうか。むしろ、自分達の方に罪があるのではないか。そう思えるのだった。

「おまえこそ誰だ」

黄玉が冷たく訊いた。伶俐な顔立ちに、よく馴染んでいる。

「俺か。聞いても仕方がないだろう。どうせ、おまえ達は死ぬのだ。」

「死ぬ気はないな」

黄玉が淡々と答えた。

小屋から一人の女が出て来た。かなりの歳にも見えるし、そうでないようにも見える、不思議な女だった。手に吹き矢を握っていた。

「ほう。八番隊の蝙蝠ではないか。蔡京のさしがねか」

九天玄女が、世間話をするかのように言った。

蝙蝠と呼ばれた男は、明らかに動揺していた。黒死軍八番隊の蝙蝠、それがこの不気味な男の正体らしい。

「おまえが来たということは、穏やかではないな」

「婆あ、きさまなぜ我々のことを」

「騒ぐな。おまえ達は闇の中で蠢いているつもりらしいが、私には

筒拔けなのだ」

「きさま、間諜を飼っているな」

「おまえ達などより、遙かに優秀な者達をな」

「ちっ。まとめて殺してやる」

「この娘を倒せたらな」

蝙蝠が、両手に湾刀※を構えた。

※湾刀 湾曲した刀。西域由来のことが多い。

「黄玉、やめて。今のあなたには無理よ」

雪華の叫びだった。牀から下りて、少しずつ歩いているようだった。

「姉様。寝てください。こんな外道に負けはしません」

「何をぐだぐだ言っている。いくぞ」

蝙蝠が跳躍した。黄玉は動かない。

黄玉の真上から、刃を煌めかせて湾刀が襲いかかって来た。一撃、そのすぐ後に二撃目が来た。僅かに頭を振って、黄玉は二撃ともかわっていた。

「黄玉、その傷では無理」

雪華の叫び声が聞こえて来た。

「ほう。おまえ怪我をしているのか。これはいい。殺した後は、おまえの肉を喰らってやろうか。うまそうだな。どこから喰おうか。胸からか、それとも尻からか」

蝙蝠は涎を垂らしそうな顔をしている。黄玉は黙ったままだった。

甲高い気合が、夜のように暗い空にこだました。蝙蝠が跳躍した。さきほどより、かなり高い跳躍だった。長い手足を伸ばしきったその姿は、羽を広げた蝙蝠そのものだった。黄玉が剣を振るう。剣と湾刀がぶつかり合う音が響いた。湾刀が空を斬り、蝙蝠が地に降りた。

「玉姉ちゃん、やっぱり傷で動けないんだ」

石勇が、心配そうに呟いた。

「傷……」

平真が訊いた。

「うん。玉姉ちゃん、雪華姉ちゃんに皮をやったんだ。火傷の痕を塞

ぐために」

「皮をやった……」

「移植って言うんだ。公孫勝という医師がしてくれたんだ」

平真は、思わず唖^あってしまった。皮をやる。口で言うほど簡単なものではないはずだった。技術的にも、そして何よりも、皮をやる方の苦痛にしても。平真はもう、馮湧の護衛兵が言っていた黄玉の騙^{だま}し討^うちなど、全く信じてはいなかった。

「そろそろ本気を出すとするか。いいな、おまえ達、俺がこの娘を片付けるまで手出しは許さんぞ。そっちの二人を抑えるのは別だがな」

蝙蝠が部下に命令した。動きたくても動けない。平真は、齒^は噛^がみしたい思いだった。

「怪我で動けないのか、おまえ」

「動けないのではない。動かないのだ」

「負け惜しみを」

「違うな。次からは動くでしょう。おまえの動きを見切ったからな」
「ほざけ」

蝙蝠が横に跳んだ。不規則な動きで、黄玉の周りを飛び跳ねた。黄玉はじっと耳を澄ませていた。

いきなり、湾刀が黄玉を襲った。黄玉は、舞うようにそれをかわした。黄玉の舞が続いた。円を描くように、黄玉は舞い続けた。蝙蝠が誘われるように、その円に近付いた。剣が煌^{きら}めいた。蝙蝠ははつとしたように、円の外に飛び退いた。右腕から血を流していた。

「この娘、驚いたな」

蝙蝠が呻いた。黄玉はまだ舞い続けている。

雨が再び強さを増してきていた。この雨は、俺に有利だ。蝙蝠はそう思った。

黄玉の舞が止まった。剣を水平に構えていた。ぞくぞくするほどの美しさだぜ、おまえは。開封府の宮城にだって、おまえほどの女はいない。さあ、俺がおまえを喰らってやる。蝙蝠は水溜りに右足をつけた。泥水を大量にはねあげた。二本の湾刀で、その泥水を叩いた。飛

沫となって、泥水が黄玉の目を襲った。

「うっ」

黄玉が目を閉じたが遅かった。目に泥水が入ったようだった。

「へへ、かかったな」

蝙蝠が跳躍した。目を閉じたまま、黄玉が下がった。

頭上で湾刀が踊った。黄玉が身体を回しながら湾刀を受けた。次々と湾刀が襲ってきた。黄玉は、そのほとんどをかわした。

「耳のいい娘だな」

耳ではなかった。黄玉は、全身で風の揺らぎを感じているのだった。何回かはかわしきれなかった。傷は浅い。黄玉は天才的な勘の鋭さで、深傷になるのを避けている。

「黄玉」

雪華の絶叫が聞こえた。

「天貴の星よ……」

九天玄女が祈っている。

「ちくしょう」

石勇が、鉄棒を握り締めて飛び出そうとした。

「待て」

平真が、石勇の肩を抑えた。

「玉姉ちゃんは、傷で思うように動けない。何とかしないと」

「いや、あの娘は何かを待っている。見届けるのだ」

平真はそう言い含めた。

確信があるわけではなかった。だが、あの娘なら何かやる。そう感じた。それに、心なしか娘の動きに誘いがあった。蝙蝠は、攻撃に気を奪われている。獲物をいたぶるように、蝙蝠は醜い笑いを顔に貼り付けながら湾刀を振り回していた。雨が急に弱くなった。

突然、辺りが真昼のように明るくなった。黄玉が足を止めた。顔は、真っ直ぐ蝙蝠に向けていた。稲光に蝙蝠の足も止まった。

轟音と共に、地が震えた。近くだった。すぐ左手の大木に春雷が落ちたのだった。

黄玉が大きく頭を振った。たっぷりと水を含んだ長い髪が、音を立
てて蝙蝠の顔を襲った。蝙蝠が吹き飛んだ。水を含んだ髪は、思いが
けない威力を発揮した。蝙蝠は地に叩きつけられると、慌てて体勢を
立て直そうとした。だが、衝撃は思った以上のものだった。立とうと
して、足がもつれた。やっとう立ち上がった時、剣尖が目の前に見えた。
気が滅入りそうな悲鳴が上がった。

平真は、左目に深々と剣を刺された蝙蝠を見詰めていた。雷を待つ
ていたのだ、あの娘は。

黄玉が剣を引き抜いた。大きな音を立てて、蝙蝠の身体が崩れ落ち
た。黄玉が上を向いて、顔に雨を受けている。暫くして目を開いた。
まだはつきり見えないのか、何度も瞬きを繰り返している。

「黄玉。よかった」

雪華の声だった。安心したのか、涙声になっていた。

「さすが……さすがは天貴の星。蝙蝠は、黒死軍の中でも屈指の手練
れ。よくぞ倒した」

珍しく、九天玄女が感情を露わにした。

「石勇、今だぞ」

平真が囁いた。

「そうだね」

頷くと共に、石勇が飛び出した。平真もそれに続く。

呆然としている黒死軍の残党を、鉄棒と三尖刀が襲った。次々と黒
い影が倒れた。

「退け、退くのだ」

黒死軍は、それまでの統制を忘れたかのように、乱れたまま森の中
に逃げ込んだ。後には、十体ほどの死体が残されている。

「あいつら、隊長が死んだ途端乱れ始めたな」

石勇が言った。そうかもしれない。平真もそう感じた。そしてそれ
は、これからの戦いに大きな意味を持つかもしれないと思った。

黄玉が二人を見詰めた。

「石勇、この方は」

平真は、ぞくりとするような妖しさを覚えた。雨に濡れた黄玉は、とても人とは思えぬ、妖しい美しさだった。

「玉姉ちゃん。この人は、俺達を助けてくれたんだ」
石勇が言った。

「平真という。元、経略使付きの禁軍都虞侯をしていた」

平真は、出来るだけ心の動揺を押し隠して答えた。

「禁軍都虞侯……。では、陳達殿と戦った武人か」

陳達とは、東汾山の頭領だろうと思った。

「そうだと思う」

黄玉の目に、一瞬殺気がはしった。

「玉姉ちゃん、この人はいい人だよ。俺には分かるんだ」

石勇がそう言って、二人の間に割って入った。

黄玉の青い瞳が、平真の目を覗き込んだ。

「悪い人ではなさそうだ」

黄玉は、座り込んだまま意識を失くしている晁蓋に目を遣った。

「晁蓋も命を張ったか」

黄玉が呟くように言った。

それから平真に背を向け、小屋の中に入って行った。

「雪華姉様。わたしは初めて、女であることに感謝しました」

黄玉の声だった。

「あの髪ね」

二人の笑い声が聞こえてきた。

平真は、いつの間にか雲の薄れてきた空を見上げた。遠くで春雷が鳴っている。

戦女神。平真は心の中で呟いた。